馬渡の眼　15

居場所の大人にできること
－ 子ども食堂篇Ⅵ －

馬渡　徳子

かくして、我が無料塾・子ども食堂は、4年前から7月からの夏休みに定例の月曜日夕方からに加えて、お盆を除き火と水曜日の昼にも開いていることから、能登半島地震の二次避難世帯で、引き続き親戚やみなし仮設住宅での生活を継続する選択をされた方々にも口コミで拡がり、就学前の幼児たちで賑わうようになった。

これまでは、小中高校生が中心で、きょうだいが居ても幼児期の子どもの参加は稀でほぼイベントの時のみだった。保護者の同伴参加も毎回5～7世帯程で、8割の子どもたちは単独で参加していた。

乳幼児の食事介助をしながら自分の食事をするパパやママの姿を観た下にきょうだいのいる子どもたちから「ここのご飯くらい、パパやママがゆっくりと食べれたらいいのにね。」「うちは、ばあばと交代で食べとったよ。」「私らが遊んであげるよ。」「畳を敷いて、小さい子が遊べるおもちゃや、お昼寝シートもあったらいいね。」との生活感溢れる建設的な提案があり、運営会議で論議し、早速に「**畳の幼児スペース兼だらだら寝そべるスペース**」をつくった。

すると、これまでイベントだけに参加していた幼児期のきょうだいたちが保護者と参加するようになり、保護者通しでまったりと会話する場面が増えていった。

畳スペースでまったりとしながら漏れ聞こえてくる先輩ママと現役ママの会話から、「ほう、そういうことだったのか・・・」と腑に落ちることが多く、私は現役の保育士さんに、この声を聴いて欲しいなあと思った。

そこで、私の職場の同僚の保育士さんにも声をかけると「実は、子ども食堂ってどんな場所なのか興味あったの。地域の新しい社会資源を知っておくことは大事だよね。」と都合のつく時間に参加くださるようになった。

やがて、その方の友人の元保育士さんや放課後等児童デイサービスの指導員さん、助産師さんと支援の輪が拡がっていった。

子どもたちにとっては、その方々との何気ない雑談から、あまり知り得なかった職業を知るところとなり、興味深そうに質問をしている場面も観られている。

この「場」は、子どもたちの提案から展開している。そういった展開を支持することができる運営スタッフのメンバーであることを誇りに思う。